英語での会話を継続させる指導モデル「D.C.Method」

Development of the "D.C. Method" instruction model for continuation of conversation

樋田　光代・原田　信之

TOIDA Mitsuyo and HARADA Nobuyuki

Ⅰ．はじめに

中央教育審議会の外国語専門部会では，今次学習指導要領の改訂に向けた審議の当初から，小学校外国語活動を全面実施する方針が示され，教育の機会均等や小中学校間の円滑な接続という観点から，小学校高学年段階の英語教育を充実する必要があるとし[1]，両者を継続的に指導していくことが課題となった。小学校と中学校をつなぐために，授業交流や一貫カリキュラムの作成等様々な取り組みが試みられ充実が図られている。本研究は，「聞くこと」「話すこと」の指導において，会話の指導に着目し，会話を継続させていくための指導を発達段階に合わせて指導することによりコミュニケーションの能力の伸長を図るものである。

小学校外国語活動を小学校1年生から導入してきた特区と，学習指導要領の移行措置を受けて実施し始めた地域等とでは，外国語活動の実施状況は大きく異なる。小学校入学に英語を習ったり，しゃべる練習をしたりしたことのある経験者が75％を占める地域もある[2]。これらのことは，発達段階や児童の実態，レディネスを明らかにしたうえで英語の時間を運用していくことの必要性を示唆している。小学校の英語の授業について「年間英語活動時間が増加すると英語活動が楽しいと感じる割合が低く，いやなことがあったと感じる割合が高い」[3]という調査結果もある。ベネッセが行った中学校英語に関する基本調査[4]によると，中学生にとって，英語は最も好きではない教科の一つになっている。小学校では「英語ノート」の改訂や教材の整備が進み，中学校では英語の時間数増加を迎え，この時期においては，小学校と中学校の児童や生徒の実態を踏まえ発達段階に応じた，両校種間をつなぐ指導法の開発が急迫した課題といえよう。

Ⅱ．「話すこと」の実態と課題

１．「話すこと」に関する実態調査

2005年に国立教育政策研究所が，中学校第3学年を対象に行なった「話すこと」に関する調査[5]では，1998年版学習指導要領に示された「話すこと」の内容がどの程度身に付いているかを明らかにする目的で行われ，定型表現としてよく練習したと思われる表現等について概ね良好と判断された一方，英文を聞いて瞬時に判断し，繰り返すなど処理速度が求められる場合の能力など，即応力や応答力などについては，いまだ十分とは言えないと判断された能力とされ，「話すこと」に対する指導が難しいことが浮き彫りとなった。このことは，これまでの会話指導に対し，主要言語材料の一部を変えてやり取りをしているだけで，聞き手の判断を加えた応答を行う指導が不十分であることを示すものである。中学校３年生に対し実施されたこの調査を考えると，小学校で英語活動が実施されるようになった今，それぞれの発達段階に合わせて段階的な指導を行うことが，「話すこと」の指導の充実につながることが考えられる。

２．学習指導要領に見る有効性

小学校と中学校の両方で「積極的にコミュニケーションを図ろうとする」ことは共通の目標となり，連続的に指導する内容も明らかにされた。小学校では，コミュニケーション能力の素地を育成し，中学校では，４技能などのコミュニケーション能力の基礎を養うことが示されている。小学校と中学校の両校で取り扱う「話す

こと」と「聞くこと」に関しては継続した指導を行うことが可能になったわけである。中でも中学校においては，学習指導要領の指導事項の中で「話すこと」（エ）のには，「つなぎ言葉を用いるなどのいろいろな工夫をして話を続けること。」[6]が挙げられており，会話を続けることができるよう，段階的な指導の試みが必要とであると言える。

３．会話の継続に必要なコミュニケーション

会話を継続させていく指導が求められているにもかかわらず，その指導が充実していかない理由の一つに，教師，生徒のコミュニケーションに対する意識が挙げられる。「積極的にコミュニケーションを図ること」について，生徒，教師ともに重要視していない点という調査結果[7]もある。教師がそれを大切にした授業展開を行っていないことの背景の一つに，「積極的にコミュニケーションを図る姿」が中学校ではどういう姿なのか，相手と視線を合わせて会話をすることや，はっきりと伝わるように話すといった態度面の姿なのか，相手の話したいことを理解し，その意向をくんで話を発展させていくという会話の技術面の姿なのか，漠然ととらえられていることが考えられる。教師が生徒の実態を把握するためにも，どんな姿が見られた時，積極的にコミュニケーションを図る姿なのかを定義する必要がある。中学校外国語（英語）の学習指導要領も小学校と同様，学年ごとに内容が定められるのではなく，実態に応じ弾力的な運用ができるよう，３年間を通した学習内容が設定されている。とはいえ中学校３年間の生徒の発達の差は大きく，ある程度の系統性を有するコミュニケーションの段階的向上の姿を考え指導にあたることで，効果的なコミュニケーション能力の育成を図る必要がある。

Ⅲ．D. C. Methodのねらいと構成要素

会話を継続させていくことは簡単ではない。発達段階に合わせた指導が必要である。ここで述べる会話とは，単に質問と応答といったつながりのないやり取りの連続を意味するのではなく，話し手の話の内容に着目し，それに関して新たに生じた疑問やさらに知りたい情報を求めるために次の発話を行なっていくものである。相手との関わりの深化継続をも意味するものである。会話の継続のためには，話したいことを持ち，相手との関わりを持ち続けるといといった人とより良く関わるためのコミュニケーションスキルの面と，聞きたいことを伝わるように英語で話すといった言語面での指導が必要である。Deepen Communication Method (以後，D.C. Method) は，主要言語材料の指導だけでなく，それを使用する場面において，相手との関わり方に関する指導と，スムーズに会話を展開していくための表現を取り入れた指導を行なっていくことで，会話の深化継続を図っていくものである。

本研究で開発した会話継続のための指導法としてD.C. Methodは，相手の発話の内容を正しく受け止め，それに対する反応を行い，相手の話に関わった新たな発話を促すものである。この指導法の構成要素として，①相手との関わりを維持し継続していくためのスキル（コミュニケーションスキル）と②会話と会話をつないでいく簡単な表現（リンクワード）を取り入れた。それぞれの内容を示す。

１．コミュニケーションスキル

「コミュニケーションを大切にしましょう」よく聞かれる表現である。人と関わりながら話したり聴いたりする英語の時間においては，「目をあわせて会話をしよう」「大きな声で会話をしよう」「スマイルを大切に会話しよう」といった行動面の指導がされることが多い。中学校では，「Noと言ったら一言付け加えよう」というように，さらに具体的な場面での指導を行なっている。児童生徒に求めるコミュニケーションがどのような深まりをもっていくものなのか，どのように高まっていくものなのか，漠然としてわかりにくいものとなっている。会話の場面は，人と関わる時間である。その際の態度は，ソーシャルスキルと通ずるところがある。そこで，ソーシャルスキルの分類の一例（相川1999，小林2005）[8]にのっとり，４つに分類し，さらに英語の場面に合わせ以下のように整理した。

- 「基本的かかわりスキル」―目をあわせて会話をする，最後まで話を聞くといった，基本的な関わり方を表す
- 「関わり力」―相槌をうったりしながら関わりを続けていこうとする力
- 「深まり力」―より詳しい情報をやりとりしていこうとする力
- 「乗り越え力」―関わりを続ける際に起こりうる困難を乗り越え，関わりを維持していこうとする力

これらの力を，会話を継続していくためのスキルとし「コミュニケーションスキル」と定義した。

2．リンクワード

これはいわゆるクラスルーム・イングリッシュの一つである。教室で使われる英語表現を大きく2つに分類することが可能である。それは，教師が授業を運用していくために使用する表現と，児童生徒が表現と表現をつないでいく表現である。この後者の方をリンクワードと名付けた。会話においては，自己の言語材料と他者の言語材料を，接続させる連結語として機能するものである。これには，相づち・うなずきなども含まれる。Thank you. Your turn. How about you? I don't know. Me, too. など，リンクワードは簡単で覚えやすい表現であり，伝えたい内容を表現するのに十分な文法知識や語彙を持たない児童生徒にとって，その足らない言語表現を補い，伝えたいことを伝えることができる有効な表現である。例えば，自分の住む地域の名物を学んだ児童が，それについて出会った外国人に伝え，相手の国では何が名物かを聞きだしたい場合，What is famous in your country? という疑問文が作れなくても，Now it's your turn. と切り返すだけで，情報が得られることも考えられる。

柔軟な発想を持つこの発達期の児童生徒にとって，リンクワードの導入は会話の継続に大きな役割を果たすものと期待される。リンクワードについては，中学校学習指導要領外国語で，言語材料の分類の一つである，「語，連語及び慣用表現」の中で，慣用表現が挙げられており，リンクワードはこの中にその多くが示されている。このリンクワードを活用させていくことで会話をスムーズに継続することができると期待される。

これらの2つの要素は，主要言語材料のみのやりとりから，相手との関わりを深めていくための会話継続に有効な要素であり，これらをあわせて指導していくことで会話の深化継続を図っていくのがD.C. Methodとまとめることができる。

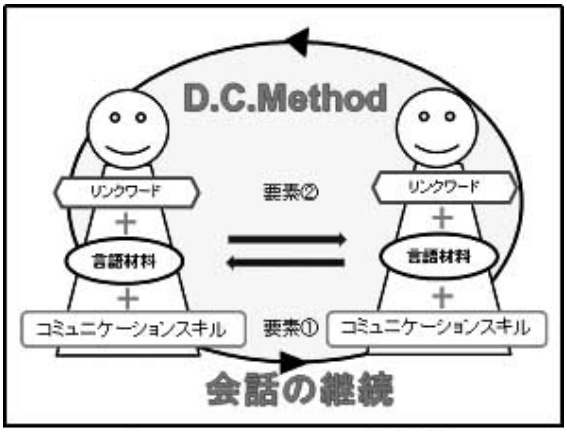


図1：D.C. Methodの構成要素

Ⅳ．発達段階にあわせたD.C. Method

1．D.C. Methodの基本形

会話指導は従来から行われており，一般的には，言語材料を示したあと，実際の会話の仕方を例示（modeling）し，会話活動を行なったあと，活動の振り返り（feedback）を行う。D.C. Methodは，これにコミュニケーションスキルのimaging，会話のplanning，前回の復習，reviewingを加える。そのサイクルを，次頁図2に示す。特にこのplanningは，ソーシャルスキル・トレーニングの体験学習モデル(Kolb et al., 1971)[9]から取り入れた。

従来の指導法と異なるのは，modelingやplanningの段階で，相手との関わりを深めていくために使うと良いコミュニケーションスキルや，理解や不理解を伝え，会話の内容に関わりながらより詳しいやり取りをしていくために効果的なリンクワードを提示し指導していくところにある。小学校低学年から中学校まで，発達段階に応じて指導内容を発展させていくことで，児童生徒にとって無理なく会話を続けてい

くための力をつけることができると期待される。

D.C. Methodは，週一回，授業の始まりの５分間から10分間程度を使って継続的に行う。

２．小学校低学年段階のD.C. Method

小学校低学年の時期は，英語活動との出会いの時期ととらえることができる。体を動かしたり歌を歌ったりすることを好む時期でもあるため，友達と関わる活動を設けながらその中で基礎的関わり力を高めていく必要がある。挨拶をすることや，人の話を最後まで聞くといった基礎的関わり力は，低学年の学校生活全体で指導されることであり，英語活動の中でも行なっていくことでより教育的効果を高めることができる。先に述べたように，入学前の英語の経験に差が多い場合は，英語の能力に関わる評価を行うだけでなく，相手がいなくて困っている児童にHelloと話しかけて関わっていく児童やわからなかった時に関わりをやめず，教師や仲間に尋ねるといった「乗り越え力」の指導を積極的に行う。D.C. Methodの基本形を図２に示す。

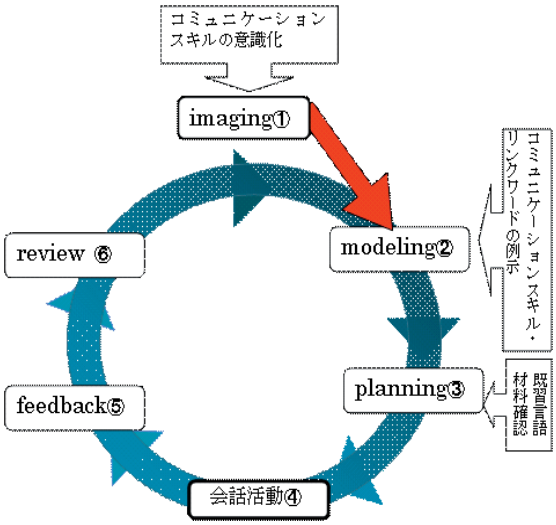


図２：D.C. Methodの基本形

各段階の指導は以下のとおりである。

①　imaging

紙芝居等による基礎的コミュニケーションの必要性の理解

②　modeling

教師の例示により，相づちなどのリンクワードの提示とその効果について気づかせる。

③　planning

教師の問いかけによる活動のイメージング

④　会話活動

スクランブルによる会話活動

⑤　feedback

児童・教師による評価

・英語の表現に関する評価

・コミュニケーションスキルとリンクワードに関する評価

⑥　review

次の会話活動の前に，前回使用したリンクワードや，その他の表現等を再度確認してから活動を始める。

低学年は，発達段階を考え，会話を記録しない。一回の会話にかける時間も短く，挨拶，じゃんけん，好きな物（既習言語材料から選出），理解の反応，挨拶という流れでできるだけ多くの児童と触れ合えるようにする。

低学年の会話活動は，音楽がかかっている間に歩き回り，会話の相手を見つけて英語でジャンケンをしたり挨拶をしたりして既習言語材料のやりとりを行う。短い会話であるが，自分からペアを作り誰とでも同じように関わることができるよう促すことができる。

３．小学校高学年段階のD.C. Method

既習言語材料が少しずつ備わるこの時期は，友達との関わり方も多様になる。A小学校の６年生に対し意識調査を行なったところ，会話を楽しいと感じる時は「相手が相づちをうってくれたとき」と答えた児童が最も多かった。このことからも，「関わり力」の指導を中心に進めていくことが重要となる。左にあるD.C. Methodの基本形に加え，会話を行なった際に相手が何を答えたか，自分はどんな相づちやリンクワードを使い，活動に困った際どんな手段でそれを乗り越えたか等を記録する。この記録の部分が低学年のモデルを発展させた部分である。

各段階の指導は以下のとおりである。

①　imaging

コミュニケーションのイメージ図によるコミュニケーションの発展を知らせる。

② modeling

教師の例示により，相槌などのリンクワードの提示とその効果について気づかせる。

③ planning

児童の発想を生かした会話のイメージ化

④ 会話活動

スクランブルによる会話活動

⑤ feedback

会話の活動記録表を持ち，相手の回答と，自分が使用したリンクワード，詳しくするために使った英語表現を記録していく。また，授業者も，見つけた活動中の児童の会話の深め方，リンクワードの活用の様子や会話の活動記録表に書かれた評価を具体的に広める。

⑥ review

次の会話活動の前に，前回使用したリンクワードや，その他の表現等を再度確認してから活動を始める。

高学年の会話活動は，その日話す内容も児童と共に選び，プランニングを行う。プランニングの段階では相手にする質問の発話練習だけでなく，相手が答えたらそこから更に何を聞いてみたいかアイデアを出し合う。例えば，暑い夏の日にWhat drink do you like?を尋ねることが決まった場合，I like juice. と相手が答えたら，自分は，Me, too. と応えることや，What taste?と味を聞きたいこと等を出し合い，実際の会話をイメージさせる。会話は，一回1分間続け，3人と会話した後，相手の答えや自分がどんな相づちを使ったか，相手にどんな質問をしたか，あるいはわからなかった時どんな手をうったか等を記録していく。

4．中学校段階のD.C. Method

小学校英語活動と中学校英語の会話活動における違いの一つに，時や場所，程度などを表す，副詞句など，詳しく説明する表現が使えるようになることがある。中学校で学習する過去形や，条件を表す副詞節なども，生徒の生活についてより詳しく表現する重要な手段となる。このように既習言語材料がある程度備わる中学生で最も重視すべきコミュニケーションスキルは「深まり力」である。相手の話の内容に着目しそれに関わった質問をし，会話を深めることができる。会話を楽しいと感じるのは「会話がつながった時」であると回答する生徒も多くなるのがこの時期である[10]。小学校で「誰とでも活動する」という態度が定着し，自分から相手を見つけて活動をするスクランブル活動から，着席して落ち着いて話をする活動が多くなる。着席しての会話活動は，落ち着いて活動に取り組むことができるうえ，話す時間の確保ができるため，学年が上がるごとに多く取り入れられるようになる。個々の会話の量が増える反面，全体で，個々のペアがどのように会話を行っているかの把握が困難になる。そこで取り入れたのが，会話を観察し評価するコメンテイターである。中学生になると，既習言語材料が蓄えられると共に，内面的な変化も起こり，自分の言いたいことが相手に伝わったかにより興味がむいたり，同世代の評価が気になったりする。コメンテイターは，会話者２人とその会話を客観的に観察し，評価のコメントをする。同年代のコメンテイターに自分たちの会話の深まりを評価してもらうことで，会話の内容に注意が払われ，ペアによる会話活動よりも会話の内容が深まりより充実させることができる。３人は役割を交代していく。コメンテイターは，会話の評価者であると同時に，会話がどのように深まっていくか，どのような反応が会話を楽しくさせるか等について会話のサンプルから学ぶことになる（図３）。中学校でのD.C. Methodは，その一部をこの３人による会話活動（トライアングルトーキングと命名）によって行う。

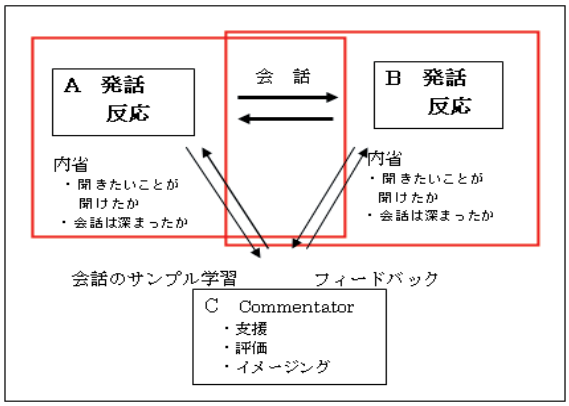


図３：会話者とコメンテイターとの学習関係

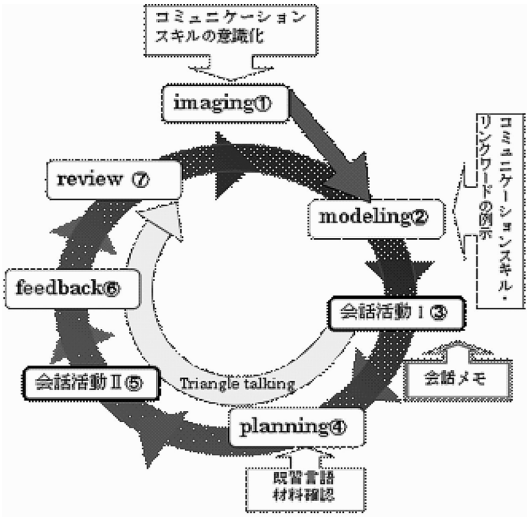


図４　中学校のD.C. Method

ここで，この３人で行う会話活動を取り入れたD.C. Methodを示す。

各段階のステップは以下のとおりである。

①　imaging

コミュニケーションのイメージ図によるコミュニケーションの発展を知らせる。

②　modeling

モデリングによる関わり力の理解。教師例示により，相槌などのリンクワードの提示とその効果について気づかせる。

【以降，トライアングルトーキング】

③　会話活動Ⅰ（１分間）

話題について１分間の会話を行う。コメンテイターは会話の内容を聞き取り，日本語でメモを取る。

④　planning

会話をしていたペアは簡単にメモを取る。その後，困ったことや，こんな表現がもっと知りたいといった質問，教師による生徒の活動の様子やアイデア等について交流し，次の会話のプランをマッピングにより行う。この際，コメンテイターも話し手のペアの様子から学んだことを生かして「会話展開図」（マッピングによる図）を書く。

⑤　会話活動Ⅱ（２分間）

会話Ⅰと同じテーマで会話を行う。コメンテイターはお互いの良いところなどアドバイスを記録する。

⑥　feedback

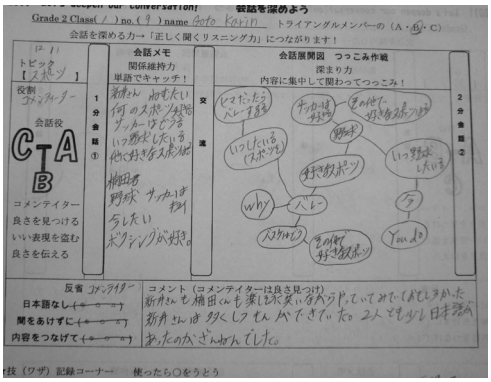
まずコメンテイターが話し手である２人の会話の良さや継続の様子，アドバイス等を伝える。会話を行ったペアはそれを聞き，会話Ⅰと会話Ⅱの違いや感じたことなどを記録する。授業者も，具体的な会話の良さを全体に広め評価する。

【ここまで，トライアングルトーキング】

⑦　review

前回書かれた生徒の「会話展開図」を紹介するとともに，使用された英語表現やリンクワードを確認したのち，今回のmodelingを提示する。

このトライアングルトーキングはスクランブル活動とは異なり，同じ相手とじっくりと会話をすることができる。会話①と同じ相手，同じテーマで会話②を行うことで，その間にあるplanningの時間が重要になってくる。会話①の会話の内容をメモし，相手が言いたいアウトラインを知ることができるため，それに対してどのように会話を展開していくかのプランを具体的に立てることができる。例えばWhat animal do you like? をテーマにする場合は，話し手は犬が好きらしいという会話①で得た情報を元に，ペットは飼っているか，どんな犬が好きか，大きい犬か小さい犬かどちらが好きか，といった新たな質問を，どの既習言語材料を使用することで尋ねることができるかを考えることができる。中心の話題から内容につながりを持たせながら会話を展開することができるよう，下にある写真は生徒が作成したマッピングによる，会話展開図である。プランニングは，話したいことと既習言語材料を結びつけるための時間といえる。



中学２年生の生徒の会話展開図

会話の継続は容易ではなく，発達段階にあった指導が重要である。上に述べたように，発達に合わせてD.C. Methodを実施することにより，会話の継続に対する効果を確かめた。

Ⅴ．D.C. Methodの効果検証

1．調査対象と方法

平成23年度，A小学校１年生と６年生，隣接するB中学校の２年生に対し，D.C. Methodを実施し，その効果を検証した。B中学校に入学する生徒のほとんどがA小学校の卒業生であり，いわゆる一小一中の関係にある。５月に３学年の各２学級に対し，意識調査とインタビュー調査からなるプレテストを行なった。インタビュー調査では小学校１年生は簡単な挨拶等を行ない，その中で意識調査も行なった。小学校６年生と中学校２年生には，質問紙による意識調査と２分間の児童生徒主導による自由会話と１分間の教師主導による会話を行い，その様子をVTRに記録した。各学年のひとクラスを実験クラス，もうひとクラスを統制クラスとし，実験クラスにおいてD.C. Methodを行なった。

調査を行う対象者数は以下のとおりである。

Ａ小学校：第１学年52名
（男子26名，女子26名）２学級
第６学年62名
（男子33名，女子29名）２学級
Ｂ中学校：第２学年68名
（男子34名，女子34名）２学級

D.C. Methodは５月から12月まで，小学校１年生が計10回，小学校６年生と中学校２年生が計15回実施した。ポストテストはプレテストと同様の内容で12月に実施した。

2．意識調査の結果

プレ意識調査により，以下のことが明らかになった。

- 小学校入学前の英語経験の差が大きく，英語を経験していない児童にとって英語を難しく感じる傾向があること。
- 小学校６年生，中学校２年生共に，会話を楽しいと感ずる時の回答として最も多かったのが，「相手が相づちなどで反応をしてくれた時」であり，「相手が目をあわせて会話をしてくれた時」を大きく上回ること。
- 相手が言ったことがわからなかった時に「わかったふりをする」と回答した中学校２年生は，22%に上り，形だけの反応が定着しており，相手の発話の内容を理解しようとする姿勢がやや乏しいこと。

この結果を踏まえ，小学校１年生においては正しく元気に英語を発話することと共に，分からなかった時に進んで聴きに来ることで解決していった「乗り超え力」を評価したり，新しい相づちのリンクワードYou do. やNo way! 等を導入したりしていった。

D.C. Method実施後のポスト意識調査では，小学校１年生の全員が，英語の時間を「楽しい」あるいは「どちらかと言えば楽しい」と答えており，指導が一定の効果に結びついたと言える。また，中学校２年生の実験クラスの生徒に尋ねたところ相手の言ったことがわからないとき「わかったふりをする」と応えた生徒は９％に減った。これは，会話を継続していくためには，相手の話の内容を把握しなければならず，そのために，機械的にI see.と相づちをうつ代わりに，Once more, please.やSlowly, please.あるいは，自分の理解したことを繰り返して確かめる等の「乗り越え力」を身につけたことが考えられる。

3．インタビュー調査の結果

プレテストで明らかになったことを以下に要約して列挙する。

- 小学校１年生において，94%の児童が目をあわせて会話をすることができており，指導すべき基礎的関わりスキルを精選していく必要があること。
- 小学校６年生の多くの児童が２分間の会話を継続することができるが，「何の動物が好きか」「何色が好きか」といったつながりのない質問を繰り返していること。
- 中学校２年生の会話の展開も小学校６年生と変わらず，２年間の英語学習経験の差がありながらほとんど会話の展開に変化が見られないこと。

D.C. Methodの実施により，小学校１年生においては，わかったときは，OK!と合図をすると相手が安心することや，わからなかったときは，Pardon？と聞き返すことで相手の支援が得られること等を，紙芝居を使ってmodelingの段階で示した。実験クラスにおいては，OKのリンクワードをポストテストにおいて75％の児童が表出しており，D.C. Method実施中に新しく学んだ動物の名前を聞いて正しく絵に指し示すことができる児童が統制クラスよりも多くいることも分かった（$t=2.838$, $df=49$, $p<0.05$）。これは，正しく理解をすることに注意が払われるようになったことが考えられる。

下に示すのは，中学校２年生のD子のプレインタビューにおける２分間の会話展開記録で，34のサンプルのうちの１つである。

表１: 中学校２年 D子のプレインタビュー記録

No.	プレインタビュー　D=D子T=教師
①	D: What's your name? T: My name is Mitsuyo Toida.
②	D: What color do you like? T: I like yellow and black. D: Oh, me, too. T: You, too. OK.
③	D: What sports do you like? T: I like golf. D:Oh, I don't like golf.　笑い　うんっと Do you.. Do you like どうしよっかな Do you like あ、
⑤	What character do you like? T: I like Crayon *Shinchan.* D:うなずく　笑う うんっと
⑥	What food do you like? T:I like Chinese food. D:うなずく　Me,too. うんと　えーっ
⑦	What animal do you like? T: I like dogs. D:Me,too. Do you like うんっとどうしよう
⑧	Do you like cooking? T: Yes, I do. 笑い

表２: D子のポストインタビュー記録

No.	プレインタビュー　D=D子T=教師
①	D: What sports do you like? T: I like baseball and volleyball. D: Oh, I see. I like volleyball. I play volleyball next Saturday and Sunday. T: Saturday and Sunday. OK.
②	D: Do you play volleyball? T : Now, no I don't. D:うなずく
③	Who (Which) volleyball player do you like? T: I like a girl who has a ring on her head. Do you know her name? D: Shinnabe or Maiko. T: I like her.
④	D: Me, too.　What do you play sports? T: Now? What sports do I play.. I play golf. D: 首をふる。I don't play. T: You don't play it, I see.
⑤	D: Do you like cooking? T: Yes, I like cooking *nabe.* D: 笑い You do. I like *tamagoyaki.* T: You do. 笑い
⑥	D: I (like) cooking *hambagu,* curry and rice, *medamayaki,* D: Yes, medamayaki笑い T: How about *cha-han*？ D: I don' like *cha-han.*

D子のプレインタビューの会話は，色の話から好きなスポーツへと次から次へとつながりのない質問により構成されている。D.C. Method実施後のポストテストにおいては，好きなスポーツについて尋ねたあと，自分の部活のことや，好きな選手についてなど，相手の回答を受けてそれに関わる質問をすることで会話の内容を深めていっていることがわかる。また，発達段階の差を見るために実験クラスを比較したところ，中学校２年生の生徒は小学校６年生の児童に比べ，内容につながりのある会話を長く続けることができるようになった（表３）。

表３：実験クラス小学校６年と中学校２年の比較

項　　目	t値	自由度	有意確率（両側）
Pre発問的発話数	1.529	119	0.129
Post発問的発話数	1.429	125	0.155
Pre 最もつながった会話のセット数	-0.614	123	0.540
Post 最もつながった会話のセット数	-2.950	124	0.004

一方，リンクワードについては異なる結果が

得られた。リンクワードYou do.は，中学校２年生の実験クラスよりも小学校６年生の実験クラスの方が多く使用していることがわかった。中学校２年生の実験クラスの生徒は，新しい相づちの表現You do.を使用することよりも，相手の発話を受けてさらに知りたいことを考え，それをどの既習言語材料を使うことで尋ねることができるかを考えることに意識を集中させるために，相づちに関わっては，既に使い慣れている，I see.等を使用する傾向が見られた（表４）。

表４：実験グループと導入した表現を表出した人数クロス表

度　数	You do.	No way!	Why?	How about〜?
小学校６年実験クラス	10	3	12	9
中学校２年実験クラス	5	3	14	3
合　計	15	6	26	12

なお，実験を実施した岐阜市では，小学校低学年では年間18時間を学校裁量の時間の中で，英語に慣れ親しむことを目的とした英語活動として実施している。中学年以降は教科として年間35時間を実施している。

Ⅵ．おわりに

既習言語材料を学び発話できるようにするには，定型文としての発話練習や，一部分を変えて使用するドリル練習が必要不可欠である。本研究は，一時間のうちの10分程度を使い，既習言語材料を選び出し運用しながら会話を継続させていく指導を行うものであり，簡単に実施することが可能である。D.C. Methodについては，小学校において，よりリンクワードの表出が起こりやすく，高学年においてはリンクワードを使用しながら会話を継続する力が育ってくることが分かった。中学生では，新たに学んだ相づちのリンクワードを使用することに意識を向けるより，相手の話の内容を受けて会話の内容を深めていくことに，より注意を払うことができるようになることが明らかになった。

小学校６年生と中学校２年生の実験クラスと統制クラスの比較により，D.C. Methodが会話を長く続けさせることに効果があることが分かった。小学校低学年において「基礎的関わりスキル」の習得を図り，高学年において「関わり力」を深める指導に重点をおき，中学校においてはさらに詳しいやり取りをするための「深まり力」を指導していけば，発達段階に応じた系統的連続的な指導が可能になる。

本研究ではつながりのある会話を続けることで相手との関わりを深める力を養うことに着目した。中学校２年生の実験クラスの生徒の多くが，ポストテストにおいて，自動車やパソコン，ドラマや映画等，自分の興味のある話題を考え，自分で会話を展開していった。その姿は会話を主体的に進め楽しむ姿であり，言語のやり取りを目的とするのではなく，内容のやり取りのために言語を使用する姿であった。

児童生徒を取り巻く環境が変化していることを念頭に置き，指導の適時化を図っていくことが重要である。

〔注〕

１中央教育審議会外国語専門部会（2006)「小学校における英語教育について（外国語専門部会における審議の状況)」

２樋田光代（2012)「コミュニケーション能力の向上を目指す小中一貫英語指導法」p.9（平成23年度岐阜大学大学院教職実践開発授業開発実践報告論文）

３　国本和江（2006)「小学校の英語学習意欲に関する研究」『広島大学院教育学研究科紀要』第２部第55号，pp.207-215

４　Benesse（2009)「第1回小学校英語に関する基本調査（生徒調査）報告書」

５　国立教育性先雨研究所（2005)「特定の課題に関する調査(英語：「話すこと」)調査結果(中学校)」(http://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei_eigo/index.htm：2011年５月13日アクセス）

６文部科学省（2008)『中学校学習指導要領解説外国語編』，p.14

７　Benesse（2008）第１回「中学校英語に関する基本調査（教員調査・生徒調査）報告書」

８　小林正幸・宮前義和（2007)『子どもの対人スキルサポートガイド』金剛出版，p.48

９　菊池章夫（1994)『社会的スキルの心理学』川島書店

10 前掲樋田（2012）